

「中流ホームレス」という錯覚——最近のホームレス・ルポを読む

トム・ギル

○小室明「スーツホームレス」海拓舎、

二〇〇〇年三月、二三九頁

○神戸幸夫・大畑太郎「ホームレス自らを語る」アストラ、一九九九年一

一月、二四八頁

○福沢安夫「ホームレス日記——人生すつとんとん」小学館文庫、二〇〇〇

〇年二月、二二二頁

ここで紹介する本は、すべてホームレスの人々の人生話を提供するルポである。小室氏は東京の新宿や上野のホームレス一六人、神戸氏（大畑氏は写真担当）は新宿のホームレス三四人の話を、それぞれ掲載している。三冊目は上野でホームレスをしていた一人の男

性へのインタビュをもとにした聞き書きで、自伝風な体裁をとっている。

一昔前まで、マスコミはホームレス

問題を無視しているという批判をよく耳にしたが、今ではもうそれは当たらない。ほぼ毎日、新聞やテレビにホームレスが登場しており、大型書店には「ホームレス本」が棚一杯に並んでいる。ただし、問題はその取り上げ方である。マスコミはホームレスが重大な社会問題だといながら、その実態を詳しく探る気はとくになく、むしろ面白い変わり者のホームレスの人生話を探しに行く。結果として、大衆文化には例外的な人が、いつの間にかホームレス全員の代表者になってしまう。そ

う、現在は「スター・ホームレス」の時代なのである。

TV 新聞

週刊紙

一つ目小僧に

追いかけられ

同じ質問 何十回

眠れば 夢で

インタビュ

（「ツネコ」一九九五年 一〇三頁）

この詩はツネコという女性が書いた。彼女は大阪で野宿生活をしていて、マスコミに「発見」され、スター・ホームレスになった。詩集も二冊出版し

ている(ツネコ)一九九四年、一九九五年)。大阪にいる約一万人のホームレスのほとんどは男で、彼女は女。そして詩を書くということは、野宿の物語にロマンスを求める読者の感情を揺り動かす。だからツネコは嫌になるまでインタビュ―された。一方、「普通」のホームレス、つまり、詩を書かない中高年のおじさんホームレスたちは、相変わらずインタビュ―などされていない。

ツネコ現象は数年前であるが、以来マスコミの「特殊ホームレス」探しは一層熱心になったのではないか。ホームレス研究者の中根光敏がいう、「ここ数年、いわゆるホワイトカラーだったホームレスばかりを特集した記事や、親子や夫婦のホームレスを特集したドキュメント番組を目にすることが多くなった……単なる野宿者やその増加という現象だけでは、ニュースとしての商品価値がなくなってきたのだらう」(中根 二〇〇一年)。皮肉な

ことに、ホームレス問題が長引き、膨らむにつれて、常に新しいアングルを必要とするマスコミはだんだんと問題の核心から離れていく。

そこで「スーツホームレス」の登場。去年ちよつとした話題となった小室明氏の本の帯には、大きな赤い字で「サラリーマンが路上生活者になるとき……」とあり、リストラが気になるサラリーマン読者にアツピールする。出版社によれば、初版一万冊がほとんど売り切れたという。ところが、実際に読んでみると、一六人の東京のホームレス話の内、元サラリーマンと呼べるのはたった二人だけで、残りの一四人のほとんどがブルーカラーや日雇労働者タイプ。元サラリーマンタイプは恥ずかしがって、あまり話をしてくれないと著者は言う(一〇頁)が、かといって彼が「従来型」と呼ぶホームレスは恥かしがらないという根拠もない。今年の四月八日、四六歳の若さでガンで亡くなった小室氏には悪いけれども、こ

の一冊は真つ赤な嘘だといわざるを得ない。ここに出てきた一五人の人物(二一章の「田中正子」はホームレスではないので省略する)の事情は左記の通り。

学歴——大卒一人、高卒五人、中卒七人、小卒二人。

出身——農漁村部二人、都市部三人。

性別——男一三人、女二人。

前の職業——ホワイトカラー二人、建設・日雇七人、ブルーカラー二人

(ともに女性で工場パート)、飲食店三人、活動家一人。

父親の職業——農民五人、漁師一人、

警察官一人、公務員一人、不明七人。

つまり、本のタイトルを無視して中身を注意深く眺めれば、ここに出てくるホームレス人口のプロファイルは意外と「ニュー・ホームレス」が少なく、「オールド・ホームレス」がほとんど

である。もう一冊のホームレス本(金子一九九四年)を思い出す。これも「普通のサラリーマンからホームレスになってゆく人たち」(帯)をテーマにするといえながら、ほとんどの人物は出稼ぎ・日雇など。著者は「ある大企業の元管理職が路上生活をはじめた」という噂を聞いて探しに出るが、結局見つからない(四一六頁)。六年経っても、小室氏らは相変わらず居もしない面白いホワイトカラー路上生活者を無理に探している。

小室書における一五人の野宿者はけっして無作為標本だとはいえないが、より大規模な調査の結果とほぼ一致する。例えば、出巻・山口(二〇〇〇年)の東京東部調査では二〇四人の野宿者のうち、一七六人はブルーカラー労働者、一八人はサービス業、残りの一〇人のうちたった四人が「専門的・技能的従事者」や「販売従事者」でホワイト・カラーだったと思われる。小室氏自身が五六頁で引用している岩田正美

東京都立大学教授(当時)らの「新宿ホームレスの実態'96」では元サラリーマンタイプはせいぜい一五・五%(「事務員」八%「販売従事者」二・五%「自営業や経営者、管理職」五%の合計)であり、しかもの中には零細企業のパートや一人で屋台を引いていた人も含まれていると思われる。いうまでもなく日雇労働者出身ではないとしても、ホワイトカラーの正社員出身だとはかぎらないのだ(笠井一九九五年、二〇〇〇年参照)。

小室氏の一五人のインフォーマントの話に戻るが、二人だけいる元サラリーマンはいずれも自発的に会社を辞めた(三四頁、四九頁)。いわゆる「リストラ組」の代表者は一人もいないというわけである。小室氏は「失業した証券マンで借金のある者」を「ホームレスの予備軍」(三三三頁)と呼ぶが、むしろ、田舎出身・低学歴・ブルーカラーがその予備軍の特徴であるのは小室氏自身の調査からでも明らかである。リ

ストラされるサラリーマンには大体失業保険があり、家があり、貯金がある。寄せ場や零細企業で働く労働者にはこうした「安全ネット」は大体ないから、すぐホームレスになる。

「スーツホームレス」の幻想を印象づけるのは、単に「本を宣伝するため」(出版社側の電話での説明)の作戦で、これほど怒る必要はないといわれるかもしれないが、評者がこうしたデタラメを許せない理由は、それが「クラスレス社会・日本」という錯覚を永続化させるからである。ホームレスになることは誰にでもありうるとしても、ルーレットと同じではない。皆ホームレスになりうるのは事実だとしても、社会階層などでその確率は全然違う。大卒のホワイトカラーのサラリーマンなら逃げ道はたくさんあり、日雇にはほとんどない——これはごく当たり前の話ではあるが、日本が平等社会だという伝説は相当根強いから、中流ホームレスの話は比較的スムーズに受け入れ

られがちである。バブル時代までは、「機会の平等」が信じられ、誰でも一流大学に行つて良い仕事に就けると思われていた。バブル崩壊後はその平等性の神話が怪しくなり、誰でも失業者・ホームレスになりうる、「危険性の平等」として生まれ変わった。しかしながら、社会階級の存在を否定するという点においては変わりが無い。

二冊目のホームレス・ルポ本(神戸・大畑)の帯では「本当に「私は彼らと違う」のか!」と挑発的に問いかけているが、その答えは「そうだよ、あなたは全然違う」である。そもそも、こうした本を買うのは主に中流層の人で、載っているのはほとんど下流層の人である。この本に登場する三三人の人物(三章の「増田良子」はホームレスではないので省略する)のプロファイルは左記の通り。

學歷——大卒一人、高卒八人、中卒二

一人、小卒二人、不明一人。

出身——農漁村部二四人、都市部六人、不明三人。

性別——男三二人、女一人。

前の職業——ホワイトカラー三人、建設・日雇一七人、ブルーカラー六

人、飲食店従業員二人、農民一

人、ヤクザ一人、不明三人。

父親の職業——農民五人、漁師三人、

小売商人七人、ホワイトカラー五

人、軍人・軍属二人、ブルーカラ

ー二人、資本家一人、不明八人。

年齢——三〇〜三九歳一人、四〇〜四

九歳五人、五〇〜五九歳一五人、

六〇〜六九歳一〇人、七〇〜七九

歳一人。

今回の三人のホワイトカラーを調べると、一人は精神病・アルコール依存者・泥棒・自殺未遂で何回も仕事を辞めている(二二〜一九頁)。もう一人は「サラリーマンはおれの性に合わないんじゃないか」(二三三頁)と、何回も会社を辞めており、残る一人だけが二

回も会社倒産において、「平成不況の被害者サラリーマン」といえるかもしれない(二一七〜二四頁)。親の職のところには確かに意外とホワイトカラーやプチブルが多いが、一部は敗戦で職・財産を失ったケースである。小室氏の本と同様、田舎出身・低學歷・肉体労働が多数の特徴となっている。大都市で迷子になった田舎の凡人、それが一般的なホームレス像である。

にもかかわらず、神戸氏もまた階層や社会地理学を完全に無視し、個人の性格にホームレスになる原因を見出す。人間が弱いからホームレスになるというわけだ——「彼らに共通する何かを彼我を分けているような気がしてきた。結論的にいってしまえばそれは希薄な父性あるいはモラトリアムというようなものだ。男として、また父親として、決断しなければならぬときにそれを回避して先送りにしたたり、危難のときにあつて、それに立ち向かうことをしなかった人が多い」(神戸二四

四一三四五)。確かに個人の精神がその人の人生に影響するのは当たり前であるし、ギャンブルや酒で自滅してしまつた人は神戸氏のインフォーマントの約半分にあたる。しかし、こういう代表的な欠点が見られない話も相当ある。例えば、信州で機械貧乏(五)になつて借金で夜逃げした農民(七三〇七九頁)や、親方制度に我慢できず家具職人の見習いを辞め実家に内証で大阪に逃げた男(二七〇二三三頁)などがそうである。

それに、いわゆる「依存者タイプ」も、注意深く読めばそうした欠点につながる経験が下地になつてることが見てとれる。特に、この人たちの青年期となると悲惨な話が多く、惨めな貧困家庭に生まれ、親の死や離婚で若いころから苦しんだ人がほとんどである。つまり、人間的な弱さはたまたま出現するものではなく、ある程度構造的な、環境的な要素により形成されるものと見るべきである。また、彼らに

は「父性」が欠けていると神戸氏はいうが、実際に子供のころ父親を自殺や戦死で失つた人は少なくとも六人で、親による虐待・遺棄などの話も多い。ということ、ホームレスの予備軍は、大企業のリストラなどはほぼ関係がなく、人の階層プラス育て方で大体説明がつきそうである。

しかし、神戸氏の本は小室氏の本よりずっとまじだ。各人の話を恣意的な枠付けなしに、ストレートに提供している。それぞれの話に読者はたちまち引き込まれる。アメリカの偉大な口述歴史家、スタップズ・ターケル(特に「仕事」一九八三年)氏を連想させる。ターケル氏の数々の本はアメリカ人の人生経験を「そのまま」提供してくれて、重要な社会史の資料になつていて、神戸氏の本に関してもそういえる。ただ、神戸氏とターケル氏には一つの共通の疑問もある。各人の話がちょっと面白すぎる、話の展開はうますぎる。書き出しは劇的で、落ちはパツチリ。

完成品には聞き手は全然出番がないが、編集の過程でどれぐらい加工したのが気になる。所々神戸氏は「切れ切れに単語が出てくるだけであつた……本人の話を元に再構成したものである」(七二頁)などその加工を認めているのは少し安心できるのだが。

それに対し、小室氏はいつも小説家の真似をしている。「ゆかり(女性のホームレス)は明るく笑つてくると背を向け、連れの男と雨の戸山公園に吸い込まれていった」(四三頁)とか。そしてかなり変わった自分の「考察」を各所にばら撒いている——「鳥は道端や田んぼの畦道に落ちている木枝、草、わらの切れ端などついばんで集め、それを巧みに操つて巣を作る。野宿者も同様にゴミ処理場で集めてきた段ボールを巧みに組み立てて自らの住み処とする。その行為は正しく本能的であり、人間もやはり動物なのだ……段ボール生活を観察していると、人間社会の原始的な生きるための知恵のような

ものを感じる……」(一一頁)などなど。

神戸氏の本は、あとがきを除いてこういう主観的な発言を避けている。同時に、本の色合いはかなり違う。小室氏のホームレスの人生話には酒やギャンブルがよく出でくるが、深刻な犯罪や自殺の話がない。神戸氏の方には泥棒・殺人者・他の前科者・自殺未遂者が続々登場し、全体として大変落ち込む話が多い。取材者の性格や調査の方法により、話してくれる人が違ってくるし、話の中身も変わってくるのであろう。

それにしても、社会科学には質的方法対量的方法という論争がいつももあるが、ホームレス問題は主に量的な方法で研究されているのではないか。頭数から総人口の基本データを作るのは勿論大事だが、神戸氏と小室氏の本はより詳細に一人一人を調べながら、相当の人数を対象にしている。その解釈には上記のように異議があるが、資料と

しては重要だと思う。こうした本はたまには出るし、お互いに比較をするとホームレス人口の実態が浮かび上がってくるかもしれない。例えば、「ホームレスになりたくない」(出会いの家編一九九六年)には四六人の釜ヶ崎のホームレスの履歴が掲載されている。神戸氏・小室氏よりわずか三〜四年前の出版だが、元兵隊の割合、そして小卒者の割合が、神戸氏らの調査よりずっと高いのが特徴といえる。こうした出版が少しずつ蓄積されることで、量・質のバランスが取れたデータベースができつつある。

ちなみに、「ホームレスになりたくない」には文句なしの「スーツホームレス」が一人出てくる——国立大学卒業→大蔵省→大企業の会社員→日雇労働者→段ボール回収・ホームレス(九五頁)。大阪のマスコミは気づいただろうか。しかし、彼の「日雇労働者」生活は「一五年間」だから、多分一目で分かるスーツホームレスではない。

もしも元中流層のホームレスが増えているのが事実だとすれば、それは寄せ場の労働市場としての機能が弱まって、失業とホームレスの間にあつた「日雇」のワンクッションが消えてしまったからではないだろうか。

三冊目の本を開いて、大変驚いた。その著者として表紙に出ている「福沢安夫」は実際に小室本の第一章の主人公、「福田光夫」と同一人物である。「ホームレス日記」は岸川貴文が「福沢」の話を書き書きましたもので、岸川はそれが仮名だと言っている(二六頁)ので、ここでは福田光夫と呼ぶことにしよう(岸川は良心的に人名などをほかにしているが、九カ月前に出版された小室氏の本ですべてそのままを出し、福田氏の写真まで載せているから、これは無駄な努力だと思わざるを得ない)。

福田氏は代表的な「スター・ホームレス」である。この二冊の主人公でありながら、「雑誌とかスポーツ新聞、

テレビも四局ほどきましたよ。一つに出ると、たくさん取材依頼がくるもんだね(二一頁)。イギリスのBBCさえカメラ・クルーを上野公園にある福田氏のテントに派遣したという(五五頁)。つまり、渋谷で二三人の子持ちの女の子が繰り返してインタビューされた結果、「やまんばママ」現象が生まれたと同様に、一九九九年度中メディアに登場した中流ホームレスの一

二割は他ならない福田氏であったという可能性は大いにありうる。なのに、正確な自己認識が特徴である本人自身が言う――「私のようなホームレスは、例外中の例外だろう」(五六頁)と。

福田氏は栃木県の農家の息子で、高卒で一九五九年岡三証券に入社し、本人の話によると一時大儲けして結婚し、横浜に立派な邸宅を買い、二人の娘が生まれるが、自分の無責任さから全部失ってしまう。仕事がつまらないから辞める。他の仕事をいくつかやってみるが、すぐうんざりして辞める。

バブル時代は、数年間高価なクラシックCDのセールスで儲けるが、同時に無謀な株投機で借金の山を作ってしまった、結局豪邸の売却→離婚→ホームレスという展開である。

山に登ってから、谷底に落ちる。山頂を見たことのない「普通」のホームレスよりずっと面白い。しかも、ツネコさんと同じく、(優れたものとはいえないが)詩を書くし、出来がそう悪くもない風景画をボールペンで描いて数千円で往来の人に売る。人間性、ユーモアもあり、確かにストーリー性十分である。三冊の本のうち、これが一番読み物として面白い。数十人の人生話を数ページずつ読むと、誰が何をやったのか、あるいは言ったか分からなくなってしまうが、「ホームレス日記」では一人の人をよく理解できるようになるし、書き手の岸川氏はけっして福田氏が「典型的」などとクレームをつけないからほっとする。むしろ福田氏は両義的な立場にある。野宿はしてい

るが、どうしてもその生活から逃げられないとは読者が信じられない。絵はよく売れているが、それをホームレス仲間に対して内証にする(八二頁)、同県人が経営しているアパートに無料で住まわせてくれるというのにそれを断る(六八―九頁)。仲間からもらったパンくずを礼儀正しく受け取るが、そこまで困ってはいないからひそかに鳩にやる(八三頁)。つまり、福田氏は調査対象者当人というより、調査中の人類学者というような立場である。

その点は少々不快だが、福田氏目は鋭いから、この本は上野公園の野宿者社会の一九九九年度の民俗誌としてかなり価値がある。皇族が上野の博物館を訪問するときの一次的な野宿者追いつし(山狩り)、六〇―六二頁)や上野の「やま」の上・下にすんでいるホームレスの区別、それと新宿や山谷のホームレスの比較(三八一―四二頁)、「マクロ」の作戦的分析(二五八―二六一頁)など、興味深い話がたくさんあ

り、読みやすい安価な文庫本で一般読者に東京のホームレスの実態をかなり正確に紹介してくれる点が評価できる(付録の「ホームレス用語集」「ホームレスの実情」も役に立つ)。ただし、こういう話のほとんどはまた聞きで、福田氏はけっして他の野宿者と同じ生活をしているのではない。

結局、一九九九年八月から始まった福田氏の上野滞在はたった九カ月で終わった。二〇〇〇年五月、「ある女性が落ち着いて絵を画くことを勧めた……関東のある静かな町で暮らして……温泉に入った(一八七頁)。ノン・スター・ホームレスから見ればまるで天国という感じだろうが、皮肉なことに、福田氏はその夏のある夜、花火見物とビールのおと、風呂で心筋梗塞を起こし、亡くなってしまった(一八八頁)。やはり、人生はある意味ではルーレット・ゲームであると思いが知らされる。ある意味ではね。

注「機械貧乏」——一九六〇年代の前

半あたりから、農林省や農協が「農業近代化」を助めて、農家は続々と農業機械(田植え機・トラクター・コンバインなど)を買い始めた。場合により農場が狭くその投資は必要ではなかったし、昔あった(とされる)田舎の共同性が希薄化されていたため、あまり共有・使い分けがなく、結局借金返済ができなくなり倒産してしまつた農家は相当あつたという。

参考文献

笠井和明、一九九五年「いわゆる「ホームレス」問題とは——東京・新宿からの発信」「寄せ場」八号、五一—四。

——、二〇〇〇年「新しくもあり古くもある下層」「寄せ場」一三号、三三—五〇。

金子雅臣、一九九四年「ホームレスになつた」築地書館。

ターケル、スタツズ、一九八三年「仕事」

中山容訳。晶文社。

田巻松雄・山口恵子、二〇〇〇年「野宿者の就労面——東京東部圏(山谷・上野)の野宿者聞き取り調査報告」季刊 *Socialities* 五号、一〇—一八。

ツネコ他、一九九四年「ホームレスの詩」大阪・遊タイム出版。

——、一九九五年「ホームレスの詩二——ツネコ詩(うた)の世界」。遊タイム出版。

出会いの家(編)、一九九六年「ホームレスになりたくない」神戸・エビック。

中根光敏、二〇〇一年「寄せ場/野宿者を記述すること」「解放社会学研究」一五号、三—二五。

〈東京大学社会科学研究所員/社会人類学〉